

「手でみる彫刻コンペティション（2025）」意見交換会 文字起こし

実施日：2025/1/13

場所：アトリエみつしま Sawa-Tadori

「手でみる彫刻コンペティション（2025）」では、石粉粘土で作成された立体作品9点に対して、出品者を含めて見える人11名と見えない人・見えにくい人6名が混じっての触覚のみでの審査会を行い、その後、意見交換の場を持ちました。なお、審査は各自、2点を1作品、1点を2作品に投票するという方式をとりました。

参加者（50音順）

| | |
|---------|-------------------|
| 安達祐美子 | 対話鑑賞ナビゲーター |
| 池上恵一〇 | 美術家 |
| 今村遼佑 | 美術作家、本イベント企画者 |
| 大西賢太郎 | 小学生 |
| 片山達貴〇 | 写真・映像作家 |
| かめいとみ〇 | アートサポーター |
| 小林由紀 | 迷大人（弱視） |
| 高内洋子〇 | アトリエみつしま |
| 高野いくの〇 | 画家、本イベント企画者 |
| 高橋耕平〇 | アーティスト |
| 中屋敷智生〇 | 画家 |
| 長谷川里江〇* | 生きる楽しみ研究所 |
| 服部正 | 甲南大学教授 |
| ひぐち〇 | なかよしマンション204号室住人 |
| 光島貴之 | 美術家 |
| 山川秀樹 | 対話鑑賞ナビゲーター |
| 米澤浩一 | 音球グレイプス・音の卓球プレーヤー |
| 米澤まさ美 | 音球グレイプス |

〇出品者 * 審査会は欠席

高野（司会）：みなさん、手でみる彫刻コンペティション、いかがでしたでしょうか。

何に投票したのか言いたくない人は言わなくてもいいんですけど、私は《あふるるる》にいれました。あと《分有》のさわり心地がすごく良かった。いれた理由としては、私は会場準備の時に見えているし、いろいろ知っているから頭で考えてしまうんですけど、完成度の高さとさわった時のびっくり感みたいなのがあった。みんなに同じ粘土を送ってるのに、扱い方が全然違う、違う素材入ってるやん、みたいな驚きがあったのが良くて、なるほどなと思っていれましたっていう感じです。みなさん、どうでしたか？

米澤浩：今日はとても楽しませてもらいました。自分としてはこれはいいと思ったさわり方についてちょっとお話ししたいです。まず布の下に手を突っ込んで両手でさわりますよね。で、でこぼこのあるものは、指を突っ込んだりしてさわる。それから今度、両手で持ち上げる。両手で支えて持ち上げるんですね、そうするとまた感じが違う。でも一番良かったのは、布の上からさわると、その作品の、あ、そうかという気づきが生まれたりして、とても良かったような気がしました。

他の人に「布の上からさわった？」といういろいろ聞いたら、ほとんどおられなかった。布の上からさわるというのもあっていいと思いました。

高野：ありがとうございます。布の上からだと形が分かるということですか？

米澤浩：そう、全体的なニュアンスがわかりやすい。

高野：例えば、目で見える場合、離れてみると全体が見える。

米澤浩：そうそう、そういう感じ。

高野：同じようなことが、てざわり界のなかでもおきるってことですか？

米澤浩：そうなんです。例えば《内なる犬》ってありましたよね。あれなんかは、さわっても「ああそうかな？」程度だったんですけど、布の上からさわると、あ、犬いた。

高野：おもしろい。

米澤浩：犬がいたんです。そういう感じ。

光島：米澤くんからその話を聞いて、僕もそういうさわやかたをしてたなあと思って、やっぱり犬ですけど、前に兵庫県立美術館で、彫刻家の中ハシクシゲさんが《触りがいのある犬》っていう作品を毛布の中に入れて展示していて、それを思い出した。布の上からさわの方がなめらかにさわれるっていう。半乾きのもあったので、それも布の上からさわの方が滑らかになった。僕の場合は、右手は中に入れて、左手を布の上からさわるという。

高野：ちなみにお二人は、どれに点をいれたか聞いてもいいですか？いれたものとそのいれた理由が聞けると嬉しいなと思って。

米澤浩：《あふるるる》にいれました。

高野：その理由は？

米澤浩：やっぱりさわった感じがいいというか。てざわりがすごくいい。《あふるるる》は向きが指定されていましたが、あの向きでさわるんじゃなく、後ろからさわるというのが、実は僕大好きなんです。すごくさわり加減が良かったです。

高野：光島さんはどうでしたか？

光島：僕も《あふるるる》にいれたんですよ。今回の僕の審査の基準はさわっていて心地よいかどうか。で、《Inside and Out》もこれはもう、さわっただけで誰が作ったのかわかるんですけど(笑)。違ったらすみません。で、僕の手がもっと小さくて、子供の手だったら、あの中に入るような。入ったらそれを一番にしたかもしんですけど、僕の手は大きくて中に入らない、それが残念で2位にしました。あとは、《分有》とか、結構名前でひかれていたんですけど。あと、二つに分かれていた《Give or Take》もそれもちょうど気にはなっていたんですけど、まあ、今回はてざわりの的にちょっともう一つかなと思って。

高野：米澤さん奥さまは、どれにいれましたか？

米澤ま：一緒の《Give or Take》。

高野：ちょっと猛々しいさわり心地の。

米澤ま：そうそう、それにいれています。私はそっちが楽しくて。

高野：ほか、どうですか？順に聞いていきます？じゃあ、片山さん。

片山：《なんかいる》が一番よくて。けっこう断トツで好きなんですけど、自分の手へのおさまりとか。あと、右手でさわると左手でさわると感じ方が違う。右利きなんですけど、右でさわった時に、ぴたっと手にくっついてくるような感じ。それが良かったです。

高野：何かモチーフはあるんですかね。よくできてますね。高橋さんは？

高橋：《供具》これが最後まで印象強くて。なんか一番不安定やったんですよ。大概の場合、面もしくは三点で立っていて、安定した中でさわって形を確かめていくみたいなき感じなんですけど、その作品は、さわるときに揺れる。あとさわっているものだけじゃなくて、そのものが設置している床面とか、テーブルとか、そのさわっている外側の世界とか空間とかが想像できた感じがして。さわってる時はそう思わなかったんですけど、終わった後の感覚というか、余韻が不思議だったんですよ。

高野：布がじゃまですよ、そうなってくると。

高橋：うん。だから、布を浮かしながらさわったり。それが僕は印象的だった。さわらずに見ている彫刻だと、そういう不安定さ、目で見ると不安定さはちょっと違うさわっての不安定さが面白かった。

高野：美術館とかだとそんな不安定な事はありませんもんね。

高橋：危ないからテグスなんかで固定される。

高野：タイトルはちょっと死に近いとか、供具ってあれですよ、仏具だったりとか、生死に関わるような命の儚さとかに関わるようなものを表現しているのかなあと。じゃあ次、かめいさんお願いします。

かめい：私は、自分の手のなかに収まるやつが、やっぱりさわりのやすいし、捉えやすいとか。大きめのとかもあったんですけど、手のなかに収まりやすいものに投票しました。さわって気持ちいいとか、すべすべしてるとか、ちょっとでこぼこしているとかそういう、きれいに作りすぎてないとか、そういうものに自分が魅力を感じるなと思って。

ひぐち：僕はその二つ。まあ、もしかしたら、うまいやつなのかもしれないんですけど、でも一番気になったのは《内なる犬》。これ、五回ぐらいさわったんですけど、それで内なる犬を感じたんですよ。五回ぐらいさわる中で分かるのが面白いなと。

高野：布をめくって目でも形を確かめたいと思うのが、この《内なる犬》かも。あと作者にもいろいろ聞きたい(笑)。ちなみに《内なる犬》をさわって犬を感じた人はどのぐらいいましたか？

米澤浩：布の上からさわって感じました。

高野：私はわからなかった。(手を上げてもらって)半分ぐらいの人はわかったみたい。

山川：タイトルを先に見たかどうか覚えてないんだけど、動物だっていうのはすぐ気づいた。

高野：途中、指めっちゃ入りませんか？

ひぐち：それ途中気づいて、笑いました。

高野：続きまして中屋敷さんは？

中屋敷：確かに三回目とかで指が入ったら、くるよね。僕は一回目でわかって、お、どこまで入るねんって。どの段階で気づくか、何回目なのかとかで印象が変わるかな。

高野：何回かさわって、味が出てくるものって何個かありましたよね。

中屋敷：僕は絵を描く時、掴めないものや訳のわからないものが欲しくて描くけど、さわるとは訳がわからんすぎるより、

ちょっとじっくりくるといふか、訳わからんすぎると本当に訳わからんくなってしまふ。ちょっと違ふ感覚だなと思ひました。

高野：自分の作品に通じるものがありますね。訳わからんすぎるとダメなのでしょう。

中屋敷：ビジュアルの場合は、その方が好きなんやけど、さわる時はなにか、ちょっとつるつるとか…

高野：そうそう、そのオノマトペで表現できるとわかりやすくありません？ツルツル、ザラザラ、デコボコとか言葉に変換しやすくと審査しやすい気がしました。

米澤浩：トゲトゲは難しいかなあ、猛々しいような表現といふのはなかなか理解するのにお時間かかりました。

中屋敷：大きさも関係するかも。大きくてゴツゴツしていると把握しにくい。

米澤浩：トゲトゲしていると、さわっている部分とさわっていない部分の差が出てくる。

高野：中屋敷さん、どれに選んだかは？

中屋敷：僕は言わない（笑）。

高野：では、服部さん、お願いします。

服部：さっき光島さんが一つの審査基準とおっしゃったんですけど、むしろ私は審査基準を三つ変えて選んでいて、形が整っていてすべすべして気持ちいいという中から、いくつかが接戦していたんですが《あふるる》を選びました。もう一つはさわっただけでは形が最終的にわからないようなもの、それはデコボコしていたりトゲトゲしているもので、自分の中で最後まで形が想像しきれない、映像として思い描き切れないものの中から一つ選びました。で、もう一つは気分的なものといふか、自分との距離感といふか、驚きといふか、これは《供具》。これはスリットみたいな形になってるじゃないですか、それが深いなあと思つて。ずっとそれがどこまでも入っていくような、ぞっとするような感じがあつて選びました。

高野：確かにどこまでいくねんといふ。布の中では想像つかないんですもんね。

服部：そう。なんか深いなあといふ。いろんな意味で深い作品。

高野：普段いろんな審査をされていると思ふんですけど。

服部：そうですね。だからこそ、審査基準を分けちゃうのかもです。一つの基準だと偏つたものが選ばれてしまうといふのがあつて。

光島：それは普段からそうしてるんですか？

服部：そうですね、障害のある方の絵画展、公募展を審査することが多いので、一つの基準だけじゃなく、いろんな間口で評価したいなど。

中屋敷：学校の美術の先生もそうで、完成度だけではなく、他の観点でも評価している。

高野：そうですね。でも、それ、点数つけるの難しいですね。私は、はっきり言つてなかったじゃないですか、美しいものにしましようとか。なので、みんな難しかったんじゃないかな。それぞれ独自の審査基準があるんだなど。でも、どの審査基準で審査をされるか分からない中で、みんな勝ちにきていると思つておもしろいと思つてます。続きまして、小林さん、お

願います。

小林：はい、私も今日来る前に、審査基準を三つ決めてきたんですけど、実際に選ぶ時には、結局基準じゃないところで選んだかもしれないというのがあります。決めてきた基準というのが、まず、「ナイスドア賞」。

高野：ナイス、ドア？

小林：ドア。最初は、作品の世界に入れる入口が見つけれられて、ああ、いいなあって思えるものに出会ったら、それにしたいなと思っていたんですけど、たまたま、昨日光島さんに頂いたメールで、入口じゃなくて、その作品の出口、私の心をそこに向かって降り立たせられるような出口の扉が見つかったらいいなあとと思って、そういうものを見つけることを一つ、心に描いてきました。で、二つ目が、「ナイス対話賞」。作品が発するメッセージを受け取って、自分が楽しい会話をできたらいいなあということを考えてきたんですけど、これはなかなか難しかったなあというふうには思いました。三つ目は純粋に綺麗でいいなあという、「好きで賞」というのを考えてきたんですけど、実際に選んだものは、二点入れたのは《あふるるる》。私の中では断トツですごい、エッジがキュッとなくなって、ずっとさわっていたいぐらい心地いい。あと、くぼみから溢れている泡みたいなものが、出ているその流れを感じられたりとか、あとは、私はあんまり指が繊細じゃないので、ギザギザしてるものをさわるのが得意じゃないんですけど、そういうなかでも、デコボコしたものを表しているのに、さわり心地がいいっていうのが、すごく好きだなあと思って最初に選びました。

次に、先にも意見が出てたんですけど《供具》。すごく揺らぎを感じる作品なんですけど、それが両手で抱えて、そっと抱き上げた時に落ちつくっていう、その感じがすごく素敵で。なんとなく、私がさわった時には左に注ぎ口があるような器みたいな感じで、実際には無いんですけど中に液体が入っているような、無いものの存在を感じるようなところもすごくいいなと思ってそれを選びました。

三つ目は、《なんかいる》。お腹のぼっこりしているようなところのつるんとした手ざわりと、ちょっとだけ微妙に手ざわりの違う上の部分と、あと、内側が変に湿ってて、このいろんな手ざわりの違いが面白いのと、結局、なにがいのかわからなかった（笑）。最後になにがいたんだらうっていう、その微妙な余韻が残ったのが面白かった。

高野：これ、なんかいました？私はどこに何かいるのかわからなくて。

小林：うちに帰っても、あれ、何がいたんだらうってしばらく考えが続きそうところが良かったなって思いました。

高野：丸く形があって、ちょっとデコボコとしていて、くぼみが浅くあって、、、

光島：全体が「なんか」なのか。

高野：あ、全体がということ？

小林：布の下に何かいるってことかも

高野：あ、そういうことなのか。

小林：三つともに共通してたのが、ずっとさわっていたいなっていう。私は指一本の1センチ以内にたくさんものがあったてもあんまり認識出来なくて。そうすると、わたしの心が狭くって、もう一回さわったら分かるかもってならなくて、あ、もういい、いいって、なる自分に気づいたので（笑）。逆に基準が偏ってしまったかも。

高野：ありがとうございます。丁寧に審査して頂きました。審査基準を決めてくるっていうのと、ナイスドア賞っていうのはあれですよね、ファーストインプレッションのことだと思うんですけど、光島さんとのやり取りで出口を考えるっていうのが新しいなって思ったのと、《あふるるる》が手ざわりなんですけど、ポエティックな物語性のあるさわり心地に感じたので、そこを小林さんは敏感に受け止められたのかなと思いました。次は、光島さん何がありますか？

光島：ええと、さっき大体しゃべったんですけど、先ほど服部さんが言われた幾つかの基準を持って審査するっていう、そういう発想が全然なかったんで、例えば服部さんの場合、審査員っていうのは一人じゃなくて何人かでやることが多いですよね。その場合、いくつかの基準を自分の中で設定するというよりも、それぞれの審査員がそれぞれの基準を持っていると思うので、自分が一番いいと思ったものを推したほうがいいように思ったりするんですけど。まあ公平さっていう意味では複数の基準ってのはよくわかります。

服部：なんでしょうね。好きなフルーツもあるし、好きなご飯もあるし、何かそれぞれについて一番自分の良いと思ったものを選んでるんですよね。大きなレストランに入って、それぞれのメニューの中から一番好きなものを選ぶっていう感じかな。

光島：前菜はこれとか。

服部：そうそう（笑）。

光島：一般的に審査の話で、持ち点みたいなのはどうかあるんですか？

服部：どうでしょう…。みなさん、どうですか？

高野：審査員とかしたことない人ばかりだと思う（笑）。

高橋：大学の採点の場合は、一応、基準ありますけど、作品はあんまり関係なくみているような。

服部：まあ、初めに審査員で合議でどういうやり方でやりますって場合もあるし、それか、事務局の方が、一人五枚ずつ付箋をつけていってください、みたいなものもありますね。でも、まあ、ある程度しぼられてきたら、あとは審査員同士の合議でやることが多いんじゃないですかね。

高野：みなさん、でも、手ざわりだけで審査するって難しいのは、比べられないじゃないですか。絵だと並べて比べることができるけど、さっき言った手ざわりの余韻とかが大事だったのかなって思います。

服部：記憶に残りやすい形とか。

高野：そうそう、絵の審査会とはちょっと違うのかなって。

米澤浩：僕、実は手ざわりというか、持った感じがよくて、《えみ》ってあったでしょ、あれに二点いれていて、持った感じがしっくりしていて、僕にとってはいつまでも持っていたいな、って思う、重さ、持った感じがとても良かった。

高野：一番小ぶりでしたよね。

米澤浩：タイトルもいいなって思いました。

高野：次、安達さんお願いします。

安達：わたしは、《内なる犬》。別にちゃんとわかったわけじゃないんですけど、手とか足とか尻尾がピンピンってなって、直感で選びました。あと、《なんかいる》。あそこに顔とか尻尾がついたら、いろんな動物になるんですけど、その手前で「なんか」でした。

高野：「なんか」。たしかにその通りでしたね。他に気になったものがあれば。

安達：あと、おっきな手、《Inside and Out》。

高野：これ、これが手だとわかった人、どれくらいいますか？さわり心地だけじゃあ、手ってわからないような。

小林：でも、親指の爪のあたりとかけっこうしっかり作ってある。

高野：(さわってみて) ほんまや。でも、穴も開いているじゃないですか、そこに引っ張られて、手ってわからなかった。ちなみに手やったら幾つぐらいのどんな人の手ですか？

安達：まるっこいやさしいイメージと、ごろっとした力強さを感じる。

米澤浩：若い人の手ではないな。手というのわかりやすかったように思う。

高野：安達さんありがとうございました。では、池上さん。

池上：僕、最初にさわったときの印象でいうと《分有》、《あふるる》と《Give or Take》が第一印象良かったんですけど、後半、布の上からさわられているのみて、僕もそれをしよっと思ってさわったら、この《供具》と《内なる犬》と《なんかいる》がおもしろくみえてきた。前半と後半で全然ちがう。さっき審査の話が出たんですけど、おととい、茨木市の「型破りなアート展」という福祉事業所が主催している展覧会の審査員をしてきたんですけど、福祉施設の審査員とか、市民部門ではお寺の住職さんとか10人ぐらいで、それぞれの持ち枠というか特別賞を誰にするのかというのだけ渡されて、朝から夕方までずっといるんですけど、最初に会場に入った時、これすごいなあって誰もがグランプリやと一致していた作品があったんですけど、昼過ぎになったらだれもそれをグランプリとはせず、他の作品もじっくり観察することで、じわじわ作品の制作のプロセスがわかったり、落書きにみえていたけど、すごくその場の声を作品に定着させているように感じてきたり、じっくり鑑賞することで最初のインパクトと違うものが見えてきた。今日もそんなふうに思えてきた。《供具》なんか、ほんとに布の上からさわると違う。

高野：それってどうなんていう声もあがっていますが(笑)。

池上：形にもよると思うんですよね。この場合は、、、

光島：僕はあんまり好きじゃない…

高野：意見が分かれますね、おもしろい。

池上：みんなのさわり方も鑑賞のうちというか、人のさわり方みて自分もあんなふうにあさわってみよか思ったり。そういうのも含めて、今日の鑑賞会はおもしろかったです。

高野：結局、どれが良かったんですか？

池上：個人的にはとんがっているのがすきなんで、《分有》と《Give or Take》。自分では作れないんですよ。なんかマイルドになってしまうんです、自分が作ると。

高野：高内さんは？

高内：長い時間さわれないなって。あんまりさわるの得意じゃないみたいで、今回、短い時間で判断しているんですけど、たぶん、家に一回持って帰って一晩過ごしたら、絶対違うものを選ぶと思うんです。さっき池上さんも言ってたんですけど、時間かけてさわると変わってくる部分があるんやろなと思います。

高野：それって、作品を審査するのと、買いたい作品を選ぶのとの違いなのかなって思うんですけど、欲しい作品か評価すべき作品かという違い。

高内：でも、やっぱり理解するのに時間がかかるっていうのはある。全体をまず把握するのに、複雑な作品だと右に何があって、左に何があって覚えて最終的に頭の中で組み立てるみたいなやり方で私はさわっている。記憶力が全然もたなくて。

高野：めっちゃ疲れませんか？

光島：僕はね、最近「触覚時間」っていつているんですけど、もっと大きくてさわるのに時間がかかる、もっと分かりにくい作品の方が好きなんです。もちろん、今回はこれで良いんですけど、もっとさわるのに困難を伴うものの方が、僕は好き嫌いというが好きなんですよ。

高野：なかなか全貌を掴むのが大変ですね。

光島：それが楽しい。

高野：覚えられないっていうのが、日頃、さわることに慣れている方との違いかなと。

米澤ま：私もやっぱり二周してわかったので、一回ではやっぱり難しいです。

光島：僕も早いけど二周はしてますよ。

高野：続きまして、山川さん。

山川：選ばないといけない、ということが前提で、一番何周もさわった気がするんですよ、そのなかで《あふるるる》《Inside and Out》《Give or Take》の三つが残ったんです。好きなものかもしれないんですけど、さわり心地とか、形が作りこんであるなあというところだったり、九点の中で印象に残った。最初、どれもインパクトないなあって思ったんですけど。

高野：辛口ですね～

山川：選ぶことが前提だったので、それで選ぶことを試みていると印象に残ったのがこの三つだったんですね。《Inside and Out》はインサイドとアウトサイドの対照が印象的で、一位にしました。《あふるるる》はさわり心地がとてもよくて、《Give or Take》は、受けているようなものと飛び出していくようなものを感じて、タイトルとの関係とか、いろんなものがバランスよく伝わってきた。じっくりみると、なるべくいろんなものに影響されずに選ぶとこれらが残ったという。

高野：まさかの消去法で選ぶという。全体をおぼえていないといけないので難しそう。

山川：単に鑑賞だけでいいなら、いろいろあるな、でいいんですけど、審査があったので。

高野：では、さいごに。

大西：《内なる犬》が好きだった。上向いて遠吠えしているような感じ。

高野：穴あいているやん？

大西：それが、口やと思う。

高野：犬ってすぐわかった？

大西：うん、そこを口やおもったら。

高野：一回、さわってみる。あ、けっこう深いですね。なんか、さわり心地のほうに意識がいった形がわかりにくい。湿っているし。

大西：でている部分が耳みたいな感じ。どっちからみても耳。

高野：正面がなくて、360度耳ってこと？

大西：あとは《あなたにわたし》。ちょっとでっばっているのがあなたとわたしみたい。あと、リングみたいな、穴に通いそうな細い糸みたいなのがあったりするのを考えたりした。

高野：なるほどね。《内なる犬》が特別賞みたいな（笑）、話題にすごくあがっている。今村さんもなんかしゃべります？

今村：僕は、最初さわったときにちょっと戸惑いがあったんですね。企画しておいてなんですけど。最初にさわった時に、あ、わからへんかもっていう。でも、さわっているうちにだんだん慣れてきて、違いがそれぞれ分かってきた。あと、二年前にこの企画を一度やっているんですけど、その時は自分も作って参加したんですね。その時は、自分が作った時の手の感触が残っていて、他の作品の鑑賞がしづらいような気がしたんです。それで今回は自分が作るのはやめて、純粋にさわるだけで参加したんですけど、意外とその少し前に自分で手で作るっていう経験があったほうが、さわるときにスッと入れるような気がした。だから、日常の中でそういうさわって判断するとか、時に前回は同じ大きさの同じ材質のものを自分で作って判断しているのが、重要だったのかなって思いました。

高野：そうですね、作って欲しかったですけど。

今村：そうですね、でも作らなかったから、それが分かったっていうのも良かった。

高野：同じ材質、同じ大きさをみんなで作るっていうのが、どうしてもやりたくて、ただ、こんなにみんなさわり心地や形が違うんだなって思った。

今村：あと、前回も思ったんですけど、柔らかいのはズルいなって（笑）、気になる。

高野：確かに、まあでも、それは意図的なのかどうなのか。答えによっては課題違反（笑）。

今村：でも、不利は不利ですよ。さわっていて不安にもなる。

高野：あと、布の上からさわるっていう審査方法が、まさかくとは思わなくて。さわり心地で審査したかったのも、みなさん、表面をやすったりもしたと思うんですけど、布の上からブームがくると、かたちの方が今回は皆さん気になったところだったのかなと思っています。

皆さん、今日は長時間お付き合いいただきありがとうございました。